

『巴里籠城日誌』校訂現代語訳
（追補・ロンドン見聞略誌）

松井道昭・横堀恵一

『巴里籠城日誌』旧名「法普戦争誌略」

渡正元 著

以下2編は、渡正元著『漫遊日誌』（田中隆二校訂、斎藤義朗翻刻）（平成12年3月、広島市立大学）第2輯31頁以降及び第3輯13頁までの普仏戦争及びパリ・コミューンに関する記事の抜粋（以上「追補」）及び第1輯18頁以降に記載の『倫敦見聞略誌』の現代語訳である。

追補

パリ市内の騒乱 西暦3月18日

このところ、パリ市内の国民衛兵が砲弾をモンマルトルに集め、蓄えていた。今朝、政府が軍を出し、これを接收しようとした。しかし、国民衛兵は、これらを抑え、従わなかった。そこで、大騒ぎとなり、双方が発砲し、それぞれに若干の死傷者が出た。国民衛兵隊司令官クレマン・トマ將軍とル・コント將軍は、国民衛兵に捕われ、集まった兵隊により射殺された。又、某大尉も同じように国民衛兵に殺された。今日は、市内の騒ぎで周りが一度に大騒ぎとなった。この折を利用して、市民が仏国の体制に一大変革を加えようとした。そして、政府要人を全て殺害しようとした。このため、政府も動揺し、今夜密かにパリを離れ、ヴェルサイユに移り、ヴェルサイユを仮の政府所在地とした。市内が乱れ、大騒ぎである。

3月19日（和暦2月29日。以下同じ）快晴

今日午後、写真館に行き、一同が座った写真を撮った。その顔ぶれは、

上野、前島¹、前田²各氏と私、それから米国人1名、蘭人1名の全てで6人である。午後、蒸気車に乗り、サン・クルー城に行った。今夜、帰校が11時であった。

今日の市内の騒動について。

昨夜、政府がパリを脱走し、ヴェルサイユにその機関を移した。このため、市内の人民が新たに役員を選び、パリ市内に仮政府を置いた。これを中央委員会³と呼ぶ。その人数が全てで35名である⁴。これらの人々が協力し、ヴェルサイユの政府に抗抵し、更に、自らの政府閣僚を選び、政府を一変改革しようとする⁵。パリ市内の兵隊が全て立ち退き、ヴェルサイユを守り、その四方の城郭外に陣を張り、国民衛兵からの襲撃や暴動に備える。パリ市内の街中での動揺や騒ぎは、言うまでもない。今、パリ市内で市民が従い、市内を監督するのは、この中央委員会の人々である。今日、これが市内の権力全てを掌握する。また、ヴェルサイユの政府がパリ市内を脱走した後、ボルドーの国民議会の諸議員も一緒にヴェルサイユに集合し、暫く、ここに機関を置き、仏全国の政治の全てを担うことになる。今日、仏国には、パリ市内外に2つの政府があるような状況で、そして、市内の人民が大いにその戦闘の準備をし、政府の閣僚を駆逐しようとする。パリ市内の所々でバリケードを築き、戦いに備えている。市内が大きく動揺する。

3月21日（和暦2月1日）快晴。

今日は、在室した。前島氏がロンドンに出発するので、今夕、送別の為にその泊まっている旅館に行った。西氏⁶が同行した。

¹ 前日に着いた、上野啓介（上野景範、後に駐米、英、墺等全権公使）と前島密（日本の近代郵便制度創始者の一人）である。

² 前田正名、後農商務次官。

³ 3月15日に組織された国民衛兵隊中央委員会のこと。

⁴ 実際は33名であった。

⁵ 中央委員会による選挙発表には、le Figaro等新聞社がまとまり、抗議声明を出した。

⁶ 西貞八郎、薩摩藩出身。

市内騒動の様子。

今日午後、市内ヴァンドーム広場で市内両派の市民が群れ集まり、討論し、激しい騒動となり、双方が発砲した。市街が動揺し、死者が14、5名、負傷者が全てで60人余りという。街中が大変な騒ぎで、混乱する。今夜、市街を歩き回り、様子を見ると、路上では、人民が群れ集り、色々な議論が沸騰し、非常に騒がしい。

3月22日 (2月2日) 晴

今日は、在室し、外出しなかった。

昨日、パリ城外セイヌ河右岸の諸要塞に陣取る独軍司令官からパリ市内の中央委員会の役員一同に一書を送り、このところ、パリ市内に騒動があり、市民が激動し、市内を変革しようとするを聴く。我が軍は、今、パリ市の右岸諸要塞にあり、もし、市内の人民が先に結ばれた条約に違反し、我が軍に敵対する意向があるならば、速やかに旗印を掲げ、攻撃してやるべきであると伝えた⁷。市内の中央委員会の役員一同からの返事では、我がパリ市民は、今回、本国を改革で一新しようとするが、予てから独軍に対し、敵対する積りはない。また、我々も今更、あの講和条約に少しでも違反する積りはない等々と述べた⁸。今日、仏中での独国の武威が轟き、恐れ震えさせていることがただ、分かる。

3月23日 (2月3日) 晴

今日、午後、上野氏の泊まっているホテルに行き、別れを告げ、別れた。今夜、同氏、市内を離れるためである。今夜、市中を歩き回り、様子を見ると議論が色々、非常にうるさい。

3月24日 (2月4日) 晴

⁷ 3月23日付コミュン側の出した官報（以下「コミュン官報」という）。掲載のパリ市内の情勢が独軍に対し敵対的であれば、敵とみなす旨の21日付コンピエヌ所在独第3軍団司令部の警告。

⁸ 上記官報掲載の中央委員会と外交担当者の22日付返書でのパリで行われた革命がパリ市内内部に関わり、独軍攻撃のものでは全くない旨弁明。

今日は、在室し、外出しなかった。今夜、市中を一通り回ったが、変わったことを見なかった。パリ市内は、依然同様である。

3月25日 (2月5日) 晴

今日は、在室した。今夜、市街を歩き回り、様子を見ると、市中の群集の評論や議論する様子は、非常に騒がしい。

3月26日 (2月6日) 晴

今朝、8時に蒸気車に乗り、レスピオー大佐の陣営に行った。このレスピオー氏は、今度のパリの騒動にその兵隊を引率し、出動し、ヴェルサイユ城外の原野に布陣していた。一昨日、私をその陣営での昼食に招いた。そこで、今朝、その陣中に行ったところ、そこには、2連隊、つまり、1師団の兵士が集結していた。今日の昼食には、レスピオー大佐と共に、某中佐が一緒であった。午後、將軍その他の諸士官が数名来た。諸兵士を集め、徒競走をさせた。今日、私は、終日、この陣中に留まり、夕刻、ヴェルサイユ城まで行き、そこから蒸気車でパリに帰った。暮7時前であった。

3月27日 (2月7日) 晴

今日は、午前、在室し、午後、市街を一周し、市庁舎に行き、その様子を見ると、四方の道路の敷石を掘り起し、バリケードを造り、数門の砲門を配置し、国民衛兵が群れ集り、陣を布いていた。市内の議論は、うるさい。

3月28日 (2月8日) 晴

昨夜より風吹く 今日、日中、在室し、外出しなかった。今夕、西氏を同伴し、一書店に行った。

今日、パリ市で投票の会議⁹があり、中央委員会の構成員を選挙した。これを「コミュニケーション」と言う。この選挙では、パリ市内の人口2百万人から2万人につき1人の代表者を選んだ¹⁰。今日、市内の市庁舎の前で数発の

⁹ 投票が26日であり、これは開票点検の会議を意味する。

¹⁰ 4月22日付コミュニケーション官報掲載の21日付中央委員会命令。

祝砲を撃ち、市内にその響を轟かせた。これは、つまり、市内にコミュニケーションの諸代表を選出し、市内の政権を任せるといふ慶事を祝賀するためといふ。

3月29日（2月9日） 晴

冷風烈にして一層の寒気を増す。今日は、在室した。午後、西氏を同伴し、再び書店に行った。夕刻、学校に戻った。今日も、市内が依然平静であった。

3月30日（2月10日）晴 冷風去らず。

今日、午後、前田氏を訪れる。時に西園寺望一郎¹¹殿が昨日、パリに到着し、今日お会いした。帰路市街を歩き回ると、市中になお、群集を所々に見た。今日、市内は平静であるが、状況が大変逼迫し、戦いになるうとする勢いである。色々の議論がとてもうるさい。

3月31日（2月11日） 曇

昨今のパリ内外の状況が逼迫し、勢いがとても迫っている。ヴェルサイユの政府は、パリの各方面への鉄道を断ち、これを囲み、その食道を断とうとするという。蒸気車の出入は、北部のみである。他は禁止された。今朝以来、諸ポストへの郵便物の出し入れを一切禁止した。今日、午後、市街を一周したが、異状を見なかった。今日の黄昏に前田氏の家の門の前を通り、白国行きを知らせた。

ベルギー行き

4月1日（2月12日）朝 小雨ながら晴目である。

今日昼時に、パリ北駅の鉄道の蒸気車に乗り、ベルギーに向った。午後1時、蒸気車が発発し、夜半1時過ぎにリールに着いた（ここは、仏白国境である）。今夜、既に深更なので、蒸気車の出発時間に間に合わなかった。そこで、同市のホテルに入り、一泊した。夜半2時である。

4月2日（2月13日）晴 夕刻小雨ながら、晴。

今朝5時、ホテルを出てリールの鉄道駅に行き、5時半に蒸気車が同駅

¹¹ 西園寺公望。後総理大臣、公爵。

を発車し、9時半にベルギーのインゲルムンステル¹²のモンブラン¹³氏の居城に着いた。今日、終日、城中に滞留した。午後、城内の庭を散歩した。

4月3日 (2月14日) 曇

今日モンブラン氏の城中に滞留した。午後この地の外を散策した。

仏国・パリ城の動乱

今日パリの官報を見ると、昨夜以来、パリ市内の国民衛兵等がヴェルサイユを襲撃しようとパリ城外に出て¹⁴、ヴェルサイユ政府の兵と開戦した。今朝から戦いの状況が非常に激烈であると報じる。

パリ城一揆動乱

去年秋、西暦9月3日、仏国のナポレオン帝が戦いに破れ、スダン城で降伏し、独軍の為に虜となった。当日、その知らせを聞くと、たちまちパリ市内は、廢帝を宣言し、これに替えて、共和制度を採用した。今春、正月28日、パリ城の抗戦が尽き、城を開き、講和を求めた。その講和ができたのが3月3日である。その前に、籠城中パリ市内では、市民を集め、防戦の国民衛兵隊を編成した。その時、市内の国民衛兵が45万人に及んだ。しかし、講和が成立した後、仏政府の閣僚等には、その共和制度が永くは続かないと見て、君主制に至ろうと密に謀る気配があった¹⁵。しかし、パリの人民等には、当然、永く立君の制度を忌み、嫌い、連帯し、立ち上がり、民主、共和の制度を守り続けようとし、あくまで、政府に抗抵し、主張を守ろうとした。密かに、大砲を小高い丘に集め、その反抗をしようとする気配があった。政府の腹の内は、当然、市内の人民が傲慢で制し難いことを知っていたため、先にその武器を取り上げ、その軍勢力を奪い、後から、政策を次第に及ぼそうと企て、落ち着き、宥めて、その銃砲を取り

¹² ベルギー・西フランドル州にある市。

¹³ 1870年10月まで日本総領事であり、同年3月14日正元に会った。

¹⁴ 4月12日付官報及びコミューン官報ともに、コミューン側からの出撃ではなく、ヴェルサイユ政府側の軍の鎮圧行動が始まったことを伝える。

¹⁵ 上記コミューン官報には、政府が王党派、帝政派に扇動されている旨の主張を記載する。

上げようとした。しかし、国民衛兵等は、敢えてこれに従わず、益々抵抗の気配を示した。ここに至り、政府は、武力を用いなければ、成功しないと考え、3月18日暁2時、若干の兵隊を率い、モンマルトルの丘の砲器を全て奪い、これを接收した。この勢いを視て、忽ち、国民衛兵の反乱が起り、待ち伏せし、これら兵器を奪い返し、戦おうとした。国民衛兵の勢力が迫まるのを見た政府軍の隊長が直ちに命令し、その国民衛兵を駆逐しようとしたが、政府軍の兵隊が皆その小銃を逆さまに持ち、あえてその命令に従わず¹⁶、一揆を起こした国民衛兵も同僚の市民の上に射つ気持ちがないとの意思表示をした。このため、一揆側に加勢する者が多く、蟻の群れのようになり、全く同等の戦力となった。その日の朝の双方の発砲で、全死傷者が百余名となり、将軍2名、大尉1名、その他の士官が国民衛兵に射殺された。この勢いに乗じ、反乱軍が直ちに市庁舎を襲い、政府の各閣僚を追い出そうとした。当日のこの勢いに手向かいできないことを知り、政府の各閣僚が密かに、市庁舎から脱走し、パリを出、ヴェルサイユに入り、ここを仮政府の仮の場所と定めた。続いて、諸軍の将がその兵隊を率い、パリ市内を出、ヴェルサイユの周囲に陣取り、その国民衛兵の乱暴な襲撃に備えた。ここに至り、市内の一揆をした連中が新たに人員を選び、仮の政府を立て、諸々の役職を置いた。これを「中央委員会」という。ここからパリに籠城し、内外の攻守の戦いが始まった。

1871年4月3日（明治4年辛未2月14日）

（現代語訳者注 正元は、この間、主として英国に滞在した。）

5月22日（4月4日）晴

今朝、ロンドン駐在公使館某の館に行き、旅券・査証認証を入手した。帰路、鮫島氏¹⁷の宿に行き、会話した後、別れを告げ去る。

5月23日（4月5日）晴

今朝7時、ロンドンのヴィクトリア駅から蒸気車に乗り、10時前、ドー

¹⁶ 3月20日付 *le Figaro*。

¹⁷ 鮫島尚信、後駐公使（初代）。

ヴァー港から乗船。午前、仏国の港カレーに着く。それから再び蒸気車に乗り、夕方5時過ぎ、アミアンに着き、直ちに宿に行き、今夜ここに泊る。

5月24日 (4月6日) 晴 暑

今朝5時半アミアンから蒸気車に乗り、8時前サン・ドニに着く。

パリ城の接戦。

今日、終日、砲声が劇烈であるとの知らせを聞く。城中から黒煙が2ヵ所に立ち昇り、市内が大きく焼亡するのを見る。パリの四方の道路は、断たれ、入ることができず、今夜ここに泊まる。今日、サン・ドニの諸砲台を一通り、見て回った。

5月25日 (4月7日) 晴 暑 今日、酷暑がとても酷い。

今日、サン・ドニに滞留する。今日、終日、パリ城中の黒煙が天を覆うを見る。昼夜、砲声が大いに轟き、辺りが震えた。このサン・ドニは、全て普兵のために占領されて警備が殊に厳しい。今日からヴェルサイユに通行する道を一切遮断し、その道を絶った。サン・ドニの中は、普軍が取り仕切り、その兵が市中に充満していた。

5月26日 (4月8日) 今暁から雨が終日止まず、暑気を大きく減らす。

今日もなおサン・ドニに滞留した。パリの砲声が非常に劇烈に響く。市内の黒煙が昼夜天に上がる。今夜、赤い煙が宿の窓を照らした。

5月27日 (4月9日) 雨

今朝から宿をサン・ドニの1学校に移す。昨夜からパリ市内の砲声が止み、今日は、聞こえなかった。市内の黒煙がなお3ヵ所から登るのを見た。

5月28日 (4月10日) 曇

昨夜、市内の砲声を全く聞かなかった。今朝、市内の黒煙が非常に減った。今日、新聞中に、今日までヴェルサイユ側で捕えた一揆の仲間の数が2万5千人に上るとあった¹⁸。

¹⁸ 5月28日付官報掲載の27日付政府発表文。

5月29日（4月11日）晴

今夕もなおパリ市内の焼亡の煙を見る。昨今、全く砲声がしない。また、変わったことも聞かない。

5月30日（4月12日）晴

今日、やっと、婦女子の類だけがパリ市内に入ることを許された。

5月31日（4月13日）晴

今日も変わったことも聞かない。サン・ドニ滞在。

6月1日（4月14日）晴

今朝からパリへの道を開き、市内に入ることを許す。しかし、市内から出ることを許さない。今朝、8時、サン・ドニを出て、小馬車に乗り、パリ城内に戻り、学校に帰った。私は、パリ城内に入り、早速、西氏に会い、市内の動乱中の事情を聞いたところ、パリの留学生一同は、危険を避け、安全であることを聞き、お互いに喜んだ。今日午後、西氏と一緒に、西園寺、前田諸氏等の学校を訪れたが、留守で会えなかった。帰路、市内の町を歩き回り、その損壊や焼失の跡を見て回った。先の暴動中、途中で市内の暴徒に脅かされ、街中の敷石を上げて防壁を築くことを手伝い、漸く、逃げ去ることができた。一つの奇妙な出来事であった。

6月4日（4月17日）晴 日曜日

今日午後、市街を歩き回る。パリの王城¹⁹はじめ、戦争中の事跡やその損害や焼失の跡を一通り、見て回った。夕方、学校に戻る。

6月21日（5月9日）晴

今日、在室し、他に行かない。今日、私は、普国ベルリンの新聞²⁰を読み、先の戦闘中に普側が分捕った仏兵、大砲と軍旗は、捕虜が445,769人、大砲が5,817門、軍旗が79流という。

6月29日（5月12日）晴

¹⁹ テュイルリー宮殿が5月22日から23日にコミュン側に放火された。

²⁰ 出典未確認。

今日パリ郊外ロン・シャンの野原において仏兵の観閲があった。私どもが行って見ると歩兵、騎兵、砲兵の隊列が殊に厳しく守られていた。その兵の数が12万人という。政府の各閣僚が出席した。総指揮は、総司令官マク・マオン元帥²¹であった。今日午後1時から夕5時半まで続いた²²。今夕鮫島臨時代理パリ着。

7月1日 (5月14日) 晴

今日は、在校し、外出しなかった。今日、新聞を見ると、このたび、仏国政府がパリ市内に20億フランの借入れを公募した²³が、昨日、財務大臣の一報告書に48億フランが申し込まれたという。その内、25億フランがパリ市内から、12億フランが仏国の諸地方から、また、11億フランが外国からであった²⁴。しかし、政府は、本来、20億フランを望み、直ちに余分を返した²⁵。

8月6日 (7月20日) 晴 日曜日

今朝10時、パリ在留の本邦人が集まり、一同の集合写真を撮った。その人々が鮫島、塩田、後藤、柏村、榑崎、戸次、堀江、西、栗本²⁶、飯塚、前田、新納²⁷、私等である。午後、西氏と連れ立ち、歩き回る。夕方、同氏の宿に行き、夜、話し合い、その宿に一泊した。

8月16日 (7月1日) 晴 暑

今日、私は、東京からの公式書面を得た。その内容

渡 六之介

その方、これまで、仏国に留学していたが、今般、陸軍兵学寮生徒に加

²¹ マク・マオンは、解放され、ヴェルサイユ政府正規軍総司令官になった。

²² 7月1日付 le Figaro に整理した状況の図が示されている。

²³ 6月21日、議会で20億フラン借入公募法が採択された(22日付官報)。

²⁴ 6月29日付官報掲載の28日の議会議事録の財務大臣の議場での報告であり、募集額を大きく上回る応募が愛国心の発露として受け止められた。

²⁵ 出典未確認。公募枠を超えた場合には、比例配分した可能性もある。

²⁶ 栗本貞一郎。

²⁷ 新納武之助。

え、歩兵学科修業を命じるとともに、その俣、留学するよう通知する。但し、学費は、従来、当省から給付のとおりである。

辛未3月 兵部省

上記公文書をパリで鯨島臨時代理に伝えられた上で拝受した。

同日の広島藩からの写し書

その藩の太田徳三郎と渡六之介は、これまで仏国に留学していたが、精勵し、勉学も上達するので今般、陸軍兵学寮生徒に加え、太田徳三郎については、砲兵学科、渡六之介については、歩兵学科に入れ、そのまま仏国で修業させることとしたので、その旨を通知する。但し、本文の趣旨を上記兩人に通達されたい。

辛未3月20日 兵部省から広島藩へ

藩からの通知書

渡六之介

その方は、自力での修業のため、仏国に留学中のところ、去る20日、兵部省から別紙写のとおり、ご通知があり、通知する。但し、修業中、特に、謹慎勉勵する費用を兵部省から下される。

辛未3月 広島藩印章

私は、思いがけず、今日まで、このように勝手にしてきたが、朝廷の命令を頂き、精神がさらに改まり、これまで抱いてきた志をいつの日か果し、ご奉公するよう、その責任がまた、重くなった。これから一層の勉勵、刻苦し、自分の身が倒れてから、勤めを辞めるだけの気持ちである。

8月18日(7月3日) 晴

今日は、室にいた。

今日、新聞²⁸に今、米合衆国の国民が36,545,987人で、内、36,581,680人が白人種、4,879,323人が黒人種、63,196人が支那在留の兵であり、日本人留学生が55人、インド人が29,733人という。

²⁸ 出典未確認。

私は、今、合衆国に留学する日本人の数を70人余りと聞く。そうすると、この55人が誤りではないか。

9月1日 (7月17日) 晴暑

今日は、室にいた。

仏郵便切手の値上げ

今日から仏国の郵便切手 (書簡を往復する値段の印) の値段を半額分上げた。これまでパリ市内宛が10センチムから15センチムに、諸地方に送る書簡が20センチムから25センチムとなる。今度の戦争の賠償金が巨大な失費となったことが理由である。

9月2日 (7月18日) 晴暑

新聞閲覧室内では、摂氏33度半 華氏91度。自分の部屋の寒暖計が摂氏27度半、華氏80度半に上がる。

今日は、自室にいた。今朝、新聞²⁹を見ると、日本政府が今般、普政府から8万挺の小銃を買い入れたとあった。その内、3万7千挺がシャスポー銃である。これは、スダン落城の日に分捕ったものという。今日、新聞閲覧室の寒暖計が華氏91度、摂氏33度半に上るといふ。これは、本年の極度であろう。

10月4日 (8月20日) 晴

今朝、ミルマン氏の学校に入校した。ボンネー氏の学校を去った。

10月17日 (9月4日) 晴

今日は、自室にいた。

私は、以前、普仏戦争の事情の小歴史³⁰を仏語で書き、それを今回、活版印刷し、一千部の本が今日全部できあがった。

10月18日 (9月5日) 晴

²⁹ 出典未確認。

³⁰ Watari, R., *Petite Histoire de la Guerre entre la France et la Prusse (Juillet 1870-Mars 1871)*, (Paris, 1871) .

今朝、小歴史500部を日本の東京に送り出した。そのため、今朝、ソシエテ・ジェネラル³¹に行った。

（追補 了）

本編は、著者が1869年11月5日、ロンドンに到着し、翌1870年3月3日、パリに向けて出立するまでの見聞の感想を述べたもので、著者がパリに入るまでに、英国の生活習慣などにどのような見方をしていたかを知る意味で、参考になるので、現代語訳したものである。

ロンドン見聞略誌

英国は、3島からなる1国である。いわゆる、イングランド、スコットランドとアイルランドの3島である。ロンドンは、その首府で、イングランド島の東南、北緯51度半にある。ロンドンは、東西4里、南北2里余りの都市で、市街が栄え、人家が稠密で、大通りや小道があちこちに走り、高層の建物が連綿と続き、欧州第一の美麗、繁華な都市である。人口が3百万人である。このロンドン市を東西に横断する大河があり、テムズという。ここに10の橋がかかり、鉄橋または石橋である。河下に「ロンドン橋」がある。その下に英語で、「テムズ・トンネル」という珍しい橋が一つある。この河水の下を通行する洞穴道であり、以前は、馬車と歩行者道路であったが、近年、鉄道を敷いた。

このイングランドの都市を4つに分け、オックスフォード、ケンブリッジ、ダーラムとロンドンとし、ロンドンが最大である。

大体、都市の形や人民の生活状態などは、もっぱら、商業が中心であり、その方面がもっとも発達している。広く万国の人と交流し、利益を求め、

³¹ 銀行の名前。

才能を磨く。万国の人をもた多くが商売のために来て、内外の企業が街に満ち、道路に溢れ、市中の賑わいもとても激しい。実際、英国は、商業立国であり、商業がとても富み、商業国といったほうが良い。

政治

その国の政治制度は、当然、君主制度で、その政治は、国王と上下両院の議会による。しかし、国王は、当然政治を勝手にはできない。議会もその権限を越えることができない。この制度がもっとも良いという。

宗教

宗教としては、第1がプロテスタント教、第2がカトリック教（この2つは、キリスト教が分かれたものである）、第3がユダヤ教、第4がイスラム教である。しかし、英国の3島では、プロテスタントとカトリック教の2派が多い。この2派が同じ源であるが、お互いに競い、争うことは日本の宗派と同様である。しかし、英国では、このプロテスタントというキリスト教の1派がもっとも広まり、勢いが強く、外国にも広く伝わり、欧州、米州、アフリカ州、ついにはアジアにも伝わり、インドや中国に蔓延する。そこで、1年中、ロンドンで印刷するこの宗派の経文³²が国内3島や諸国に出回り、約百万部に及ぶという。この経文の類が16種あるという。

教育

学校に色々あるが、2種類ある。先ず、英語でユニヴァーシティという大学があり、英国3島の中、イングランドにオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ダーラム大学、ロンドン大学のそれぞれ大きな大学が4都市にある。また、スコットランドにも、エディンバラ大学、グラスゴウ大学、アバディーン大学、セント・アンドリュース大学の4大学を置く。アイルランドにもダブリン大学の1大学を置く。英国3島に以上の9大学があ

³² 聖書を指す。

る。

さらに英語でスクールという、小学校がある。この小学校は、数がとても多く、英国の都市で設置されていないところはなく、日本の寺小屋のようなものである。このスクールには、英国人が子弟を入れる教育機関である。外国の子弟もここで学ぶ。先ず、7、8歳の男児を皆この学校に入れて先生に預ける。そして17、8歳から20歳までこの小学校で諸教科の学業を習う。教育学問の科目は、大体、読み書き、図画、算術、語学、諸歴史である。算術は、数学、幾何、代数学等である。語学は、ラテン語、ギリシア語、仏語、西語、伊語、独語などであり、どの学校でもこの語学は教えている。その他、歴史、天文、地理、動物、植物、鉱学、物産、機械、造物学科が挙げられる。ただ、小学校では、それぞれの一部分を教える。

子供は、7、8歳から18、9歳までほとんど10余年間この小学校で、これらの小科目を全て学び、その後、各自の目的やその身に適した学業として、兵学、医学、経済、制度、天文、測量、物理、化学、造物、器械、鉱学、生産と目的を決めて、大学に入り、その道を学ぶ。これは、その人の一生の学問の道である。その大学に入るには、前に習った諸学科の熟達、成否の検査を受けることになる。そして、上記の大学の入試の科目を全て学び終えた者がその大学の許可を得てから入学するというのが規則である。この大学は、公正で、国籍を問わず、他国人でもその学業に耐えることができる者は、全て入学を許す。しかし、海陸兵学校のようなものは、異なり、他国人は、容易に入学を許さない。これが国の法である。他国人で入学したい者は、その本国政府から英国政府に交渉した後、初めて入学できる。

電信設備

英国が電信線を引くのは、欧州の隣国へは当然である。地中海から紅海、インド洋、シナ海に及び、中国の香港や上海までも連絡する。とても長い電信線では、英国から大西洋を渡り、北米州のニューヨーク市に海中を通る2線がある。この2国間の距離が約2千里である。欧州からアメリカに引

く電信線は、全部で3本あり、他は、仏国と英国アイルランドからである。

私がかつてロンドンで、米英二国間の電信のやり取りの速度を訊いたところ、ロンドンから米国ニューヨークに1問発し、その答えを得るのに、約1時間で、往復5千里の海上、殆ど地球の半周を往来するという。その便利さが分かる。

先年、英国ロンドンから陸伝いにインドに電信線を引いたときに、英国、仏国、独国、墺国、トルコ、それから露国領を経て、インドに至った。そこで、この電線路が5か国を通り、5、6の異なる言語で通訳し、伝えたため、時々、誤りがあり、ついに信用を無くし、面目を施さなかったので、後にこれを止めたという。そこで、今は、英国から、インドや中国には、各州の英領の諸港に伝え、他国の言葉を借りずに、遠く中国まで通じ、時々、その新聞や情報をやり取りする。

ロンドン市中での電信線は縦横無尽に張られ、まるで蜘蛛の巣のようである。この電信の規則では、距離の遠近に応じ値段の高低がある。ロンドン市中から5、7里の市外には、短文であれば、約1シリング（日本の約1分銀）である。ロンドンから、スコットランドへは、約150里であるが、ここへは、16から18シリングとの決まりである。やり方は、先ずこちらで定価を払い、送信すると向こうの電信の係員がこれを書き写し、宛先に届けて、その時刻を記載してもらって帰る。これが大体のやり方である。

この電信設備は、全てロンドンの市中の民間企業が所有していた。しかし、今年、1870年1月、英国3島全部の電信設備を全て英国政府が買い上げ、今後、電信設備全体を英国政府が管理することになった。この英国3島の電信設備買い上げ総費用が6百万ポンドである。この1ポンドは、4両2分からほぼ5両に当たるので、総費用は、約3千万両に上る。

2月5日、政府が電信設備の規則を改正した。その概要は、英国3島の中では、東西南北、遠近に関わらず、通信料を一律1シリングとした。そして、来年ならその半分に減らす。その理由は、政府が今度、巨万の費用で買い上げたので今年中は、1シリングとるが、来年からは負担が減るためとい

う。この措置に諸民が喜んだ。かつて民間企業が電信設備を所有していたとき、英国3島の中では、遠近により通信料に20倍の差があった。スコットランドやアイルランドには、いつも20シリングを要した。しかし、今度、遠近を問わず、1シリングと決まった。これは政府の善政であり、政府も得をしたことが計り知れない。

このように英国全土の電信設備が政府のものになったといえ、まだその他の緒線や外国に引く線も多い。仏国、西国、葡国、白国、蘭国、その他地中海、インド洋、米州など他国に引くものはなお民間企業の所有で、政府は、まだ全てを管理していない。

英国が電信を始めたのは1833年で、今から37年前である（明治3年を基準）。

鉄道

鉄道は英国3島、特に、ロンドン市内外周囲に縦横に走り、その形を地図で見るとまるで壁の上の蜘蛛の巣の巣のようである。市中の鉄道の形に2種ある。1つは平地から高いところ、約2丈余りを、他は地下を掘り、トンネルを作り、家屋、道路の下を、それぞれ通す。地上にある鉄道は、市街の道路に当たると鉄や石を畳んで、橋のようにし、その下を大小の馬車や人馬が通る。この鉄道では、大体、5、6町、あるいは7、8町、遠い場合は、20町、あるいは1里置きに英語でステーションという汽車の停まり場、人の乗り降りの場所がある。ここに乗車券を売り、受け取る場所がある。先ず、汽車に乗ろうとする者は、このステーションに行き、行先までの乗車券を買い、その汽車の番号を聞き、乗り場で待つ。大体、列車が往来し、留場に来るのに、昼夜の定刻がある。どの汽車が何時何分にどこの停まり場に来て、どの場所に何時何分に着くかという定時の文書がある。この停まり場から隣の停まり場へとだんだん連続して電信線が引いてある。数多くの汽車が往復するので、その到着時刻を知らせ、衝突の危険を避けるためである。この電信設備の符号のため、各停まり場に5色の信号を付けた

高い建物の信号機がある。1つの汽車がステーションに入ろうとするときに、その隣の停まり場から電信で、5色のうち1色を示す。この時、停まり場の職員がこれを見て、今どこからどこ行きの汽車が来ることを知る。この時間が決まっている。先ず、乗りたい者は、この時刻、この場所で待ち、その方面の汽車であれば、停車次第すぐ乗り込む。この列車の客車に上中下の3等の区別がある。上等は、列車の中間に置かれ、客車の中でも美しい。中等は、その位置や車内の設備がこれに次ぐ。下等は、最前部に置かれ、蒸気機関車の近くで、機関車の騒音、振動が殊に煩い。そこで、この3等の乗車券の値段が順に区別され、異なる。他の停まり場に着くとその場所の鉄道の職員がその地名を声高に呼び歩く。この時、ここに用のある者は、すぐ、汽車を降りて乗車券を渡してから去る。もし、2等の乗車券で1等に乗る、または3等の乗車券で2等に乗る者がいれば、直ぐ罰金として2ポンドを取り立てる定めである。この乗車券に2種類あり、一つは、英語でシングルといい、行きだけであり、また、リターンという往復の券がある。この往復券は、行きの停まり場で、券の半分を裂いて渡し、残り半券を帰路に使う。

鉄道は、大体、1停止場（ステーション）に4線、6線、多いのは7線、8線ある。これは往復の線路で、汽車の進行方向がそれぞれ異なるためである。そのため、どこのステーションに行っても、ロンドン市中の四方八方どこでも行けないところがない。この停まり場からあの停まり場と記憶して乗り換えれば、歩かずに一日中数十里間を往復できる。汽車が停まり場に着くとその地名を呼ぶ。そして汽車が停まる。また、乗り降りの人がもうないと見れば、合図すると同時に、直ぐ機関が運転し、疾走する。もし地名を聞き誤ると、思わぬ遠路、意外な方向に出ることがある。

鉄道の地中トンネルにある汽車は、各車両の上に灯火を点す。これは人家や道路の下にある鉄道でいつも暗黒だからである。

また、前に述べたテムズ・トンネルの鉄道がある。このテムズというのは、ロンドンを東西に横断する一大河で、これにかかる10の橋は鉄

製か石製である。鉄道橋が5つある。ロンドン橋が上の10橋の最後である。その橋から半里ばかり下流にあのテムズ・トンネルというものがある。ここに橋をかけると大小船舶の入港が不便になる。橋がないと往来に不便である。そこで、先年、英人某が大発明して、この岸から向こうの岸まで河水の下を掘り通し、さらに地下道を作り、これをテムズ・トンネルと呼ぶ。私は、かつてこの地下道は、人や馬車が往来する市街の道路と異ならないと聞いた。そこで、私がロンドンに着いて、先ず、この地下道を通ってみたいと思い、来たが、思いがけず、最近、鉄道を敷き鉄道用となったと聞き、大いに失望した。しかし、行ってみたところ、やはり、面白かった。こちら側の岸脇のステーションに行き、鉄道まで行くのに大きな螺旋階段で地下4階まで行き、線路に至り、汽車に乗ると、直ぐ機関が運転し、暗黒中を一瞬に過ぎ、明るいところに出てそのステーションに停まった。この地下道は当然暗闇で他に見る物はない。考えれば、他の地下道を通る汽車と変わりが無い。この停まり場で汽車を降り、また数回を巡り上って、平地に出て、振り返り、初めて自分が河水の下を通ったことを知り、地下道を通った間に頭上に大小の蒸気船があったことも分からず、なお、また、自分が河水の下にいたことも覚えなかった。通り終わり、他方の岸の上であることを知り、さらに驚いた。これは実にロンドンの一件で世界の珍しいものの一つである。昔、このトンネルを歩き、往復した時の奇観が改めて想像できる。

英国が蒸気列車を始めたのが1832年で今から37年前である（明治3年基準）。

乗合馬車

ロンドンに乗合馬車がある。英国では、これを「オムニバス」という。この馬車が市内の往復に便利である点でとても優れているという。先ず、ロンドンとその周辺の村に出ても大体この馬車のない処がない。この馬車のいかない処もない。そこで、その方角を記憶して、この道からあの道と

馬車をあれこれ乗り換えれば、数十里の道でも歩かずに一日中便利である。これは汽車に次ぎ、広く便利に用いられる。しかし、市中の往来には、汽車と馬車に一長一短ある。汽車は、神速烈風のように走り、瞬間にやや遠路を行くのに勝るものがない。しかし、予め時刻と停まり場が定められている。時にステーションで待てば、直ぐ、汽車の便を得ることがある。時には、今汽車が発車した後などという時は、約半時間も時を無駄に過ごすことがある。馬車は、当然走るのは汽車にかなわないが、一日中何時でも便宜を得られない処はない。なぜなら、いつも定時である。一日中休まず、往復して種類も多い。例えば市街を散歩中、足が痛く、歩き疲れたときは、その辺を行き来する馬車を利用する。この車、いつも道路の往来が絶えないようである。そこで、馬車は、半町、1町、5町、10町とその距離に関わらず、その好きなように乗り降りが自由であるのが1利点であり、利点である。馬車は、大体、2頭、3頭、4頭の馬が挽く。

英語でキャリエージという2人、3人あるいは4人乗りの小馬車がある。これは、馬1頭または2頭で挽く。この馬車の類がとて多く、所々の街角に連なって集まる。大きな「オムニバス」馬車の往来する通りの他、別の地に行くか、希望するどの地方の郊外でも、話し合いで雇い切りできる。そこで、このキャリエージの値段の決まりがないようだ。しかし、距離の遠近により大まかな決まりがない訳でない。

英語で「バイシクル」という1人乗りの小車で、前後に2輪または3輪置くものがある。人はこれに跨って、自分の両足で車輪の運転を行い、進退の自由を操り、往復する者がとても多い。これも一つの利点がある。

ガス灯

ロンドン市内市外、都市、農村、中心であれ、隅であれ、交差点、道路、野原一面に全てこのガス灯を置き、道路を輝かすこととても盛んである。英語では、ガス・ランプという。この街灯が置かれた数が約357個という。このため、闇夜でも、道路や街灯が明るく暗闇がない。夜中でも、婦女が

道路の往復に灯火を携えずに安心して一人で歩く。ロンドンでこのガスを溜める大きい会社が5社あるという。私も以前、行って見たが、結構この目を驚かせた。

このガスを通すには地中に鉄の樋を引き、各通りの各灯に通す。家の中で灯油の灯火を使う者がまれである。皆、このガス灯を引く。英国の家屋の各部屋の多くがこのガス灯を点け、他の灯油を使う者がとても少ない。

市中で店を開く者がその店内外に数多くのガス灯を点し、夜中のその店が白昼と同じく、明るい。市街を夜中に散歩すると、道路の灯火が左右前後に連なり、店舗の灯火も連なり、その美景を言い表せない。また、汽車で市街の高い道を通り過ぎ、市街を眼下に見、走る一瞬の間に、この各通り、各街頭の夜景を一眼のもとに眺める。その美しさを言い表せず、また優れたものだ。

商店でない通常の1軒の家屋のガスの1年の費用が約89ポンドという。このガス灯もロンドン市内の民間ガス会社のものという。ロンドンがこのガス灯を始めたのが1829年で今から40年前である。

郵便飛脚会社

この郵便飛脚会社を英語でポスト・オフィスといい、その仕事は、全英国の市町村と他国に書簡をやり取りし、届けることである。この飛脚会社は、ロンドン、都市、町村を区別せず、東西南北全ての街頭にある。2、3町、あるいは4、5町の間隔でポストがない処がない。このポストに2種類あり、民間の企業であったり、街角の高さ4、5尺、回り1寸程の鉄柱を建てたりする。大体ポストはこの2種である。そのやり方の概略として、それ用の小さな郵便印章の紙がある。これを英語でスタンプという³³。ヴィクトリア英国女王の顔を書いた7、8分ほどの四角の紙である。この国章紙の値段1ペニー（1ペニーは1シリングの12分の1で、日本の約200文であ

³³ 切手である。

る) 以上1ギニーまで103種類ある。

大体、この使い方は、先ず、ロンドン市内外、英国3島、そして世界万国どこでもこの印章紙で送達する決まりである。そして、この送る書簡の軽重と距離の遠近により、印章紙の値段の高低がある。この軽重を計る器がある。通常1書簡をロンドン近くの市外四方に送るのに上の1ペニーのスタンプを使う。そして、重量が増えるに従い、スタンプも数や種類の値段が増す。これが概要である。また他国に送るのに、先ず、仏国パリに送る。その書簡通常1書簡の軽量のものが国章の値段4ペンスである(即ち日本の800文ほどである)。インドに送るには、9ペニーのスタンプが要る。その重量が増えれば、値段が増えるのは以上の通りである。世界万国どこでも送るには、皆この定めに従う。そして、送達を相互に交換するやり方である。

まず、書簡を他国やロンドン周囲四方に送るには、書簡の面にこのスタンプを張り付け、これを飛脚会社の箱穴に投げ込めば、その宛先にすぐ届く。この飛脚会社の箱穴と書いたものは、飛脚会社の店先に2個の四角い穴を開けて、ロンドン市中向けと諸地方と他国向けの2つを区別する記号があり、行き先に応じ、どちらかの穴に入れる。街頭に建てた円柱状のものの上に四角い穴を開け、国内、他国向け共に混ぜて入れる。

この書簡送達の回数を見ると大体一昼夜に4、5度である。その時間が大体、朝8時前後、昼11時と12時の間、夕5時と7時、さらに夜9時頃である。しかし、これはロンドン市内外のみであり、地方では、一昼夜2回という。また、隣国、仏国、西国などに送るのは朝夕2回である。今日昼から夕方に出したものは、その夜の汽車で送り出すので明朝、仏国パリに届く。今夜から明朝までに出すものは明朝の汽車で送りその夜、仏の都に着く。双方のやり取りは同じである。また、アジア各国、インド、中国地方から日本に送る船便が月4回ある。英国サウザンプトン港から土曜日に出る。金曜には、仏国マルセイユ港から出る。出るところが異なるが行く先は同じであり、これは日本の横浜港に行く飛脚船である。

重い書簡や大封筒を送るのに一つの簡単なやり方がある。大封筒で重い書類や写真、図書など重い書物を送るには、その封筒の左右を切り³⁴、あるいは細い糸で括り送るとロンドン市内外方面あの一ペンスのスタンプで足りる。また、仏国等に送るには2、3ペンスで良い。そこで通常軽い書簡を送るより2分の1から3分の1の値段で、重量が10倍、20倍のもの、10冊、20冊の書物を送ることができる。しかし、この場合、堅く封をしてはいけない。封を切り離す。ただ、雑書、写真像、絵図等を送る簡易なやり方である。秘密の書簡には、この方法は使えない。重量を秤り、その値段を払うことになる。

毎日の日誌、新聞を送るのも、また1ペニー銅銭である。紙の大小軽重を問わない。距離の遠近も関係ない。ロンドン市中もパリも同じ値段である。これが新聞の郵送である。また書物の送付も1ペニーの銅銭で、遠近にかかわりなくできる。これも一つのやり方である。

この書簡のやり取り、その軽重により、値段の高低があることを前に述べた。そこで、書物の重量、その費用の多寡が分からなければ、飛脚会社の店舗のいわゆるポスト・オフィスで聞けばよい。そうするとこの飛脚会社が重量を計り、適当のスタンプを張る。このやり方を知らず、適切な値段を知らず、あるいは間違ったスタンプを張り、その書簡の重量に合わないときは、ポストメン（書簡送達の担当者）が届け先の家から不足の補償金をとり、それは不足額の5倍10倍になるのが定めである。私は、ロンドン遊学中他国に滞在の友人から書物が来て、この償金を払ったことがある。

欧州の書簡の送達には、その表書きに、届け先の国名、地名、家屋番号、その人の名称をしっかりと書けば、遅滞の恐れはない。そこで他国に巨額の金額を送るのにこの書簡中にその会社の紙券を送り、届いた先の地で、その金高の紙幣を受け取る。このやり取りがもっとも速い。

³⁴ 開封郵便である。

この飛脚会社は、英国政府が全て管理するので年々利益を挙げ、巨額さを言い表わせないという。この書簡やり取りの値段は、10年前は、今の10倍であった。しかし、今は10分の1とした。これは、政府が年々巨大な利益を挙げるので追々値段を下げるためである。

私が思うに、この飛脚会社は、国土の重要事項であり、世界万国と市町村あるもので行っていないところがない。欧州諸国は当然、南北米州の諸国、アフリカの諸地方、豪州、ニュージーランドの諸群島、アジア諸国、中国地方ですで行われ、香港でもスタンプがある。しかし、我が皇国だけにこれがない。これは、早く実施しなければならないことの一つである。

郵便印章符、郵便印紙

私がロンドン遊学中に集めた世界万国の印章「スタンプ」12枚がある。これを参考に置く。

欧州 独国 (普国、独各国、ゲルマン列国)、露国、スイス、西国、トルコ、蘭国、白国 (人口5百万人)、デンマーク、スウェーデン、葡国、サルジニア、シチリア、ギリシア

米州北部 合衆国 (切手貼り付け)、カナダ (英国領)

米州南部 西インド諸島 (ジャマイカ)

豪州、ニュージーランド (南豪州 (英領)、ヴィクトリア (英領)、ニュージーランド (英領、豪州東方の一大島))

アフリカ州 喜望峰

アジア州 インド、セイロン (赤道直下にある一島)、中国 (香港)

ここに張り付けた欧米諸国の郵便券105枚は、大正4年1月20日、正監に与えた。正監は、当時、諸国の郵券を収集することに熱心で、私がかつて欧州留学中に集め、漫遊日誌に貼った、郵券を頻りに欲しがったためである。正監は、このとき17歳4か月で、東京府立第1中学校の5年卒業前であった (大正4年1月21日誌す)。

英語新式の文字

英語が広く6大州に流布し、溢れている。英国本国の3島は、甚だ広い訳ではない。しかし、世界万国の中で植民地等を5大州全てに洩れなく持っている。私は、かつて、英国人が自慢して、英国の領土に夜陰がないというのを聞いた。実に地球の全てにその領土を置き、昼夜太陽の光を受け続ける。これが英語の広く通用する理由である。

英語の綴り字で無用の文字がある。全て万国の言葉でその文字綴りの中にその言葉の発音に関係ない無用の文字がある。英語もまたそうだ。この文字は、その一語を書き記すときは、綴り字中に出てくるが、発音には全く役立たない文字である。英国人のある学者がかつてこれを改めようとして、別の文字を作り、新たに文字綴りをし、その無駄な分を省き、発音と字体を同じにした³⁵。これが1派である。また別の1派は新たに異なる文字を作り、これを英語でフォノグラフィー³⁶といった。この文字が異なる形で全く符号の類である。これは、この一派の書体で言葉を符号に変え、書くのを簡易にするものである。そこで書くのが極めて簡単で速い。

2派の字体

その1体 「the phonetic alphabet」(貼付 省略)

その2体 省略

その3体 枝、咳、戦、掴、笑、等 (省略)

その2体

その字体はこのように数もとても多い。私がロンドンで遊学中に、ある英国人が頻りに私にこれを教えようとして、度々私に勧めた。しかし、私はこれを学ぶ意思がなく、その文字の奇異なことだけを僅かに見覚えた。多くの英国人がこの文字を手紙のやり取りで使うのを見た。英国でこの文

³⁵ 発音記号を指すと思われる。

³⁶ 速記体である。

字ができてから殆ど20年経った。しかし、これを学ぶ人はまれで、まだ世に広まっていない。いつかこれを改めることができるだろうと思う。

日曜日

英国人の風習は、正月元日といっても、かつてその職業を休む者がおらず、大晦日も元日も同様に平日と変わらない。しかし、日曜日となると大きく異なる。この日は一日中、かつて家業、職業を営む者がなく、町も村も揃って、門戸を閉め、1軒も店を開け、商いをする者がなく、その様子が日本の元日のようだ。この日は、ただ夕刻4時頃から、酒屋、煙草屋、菓子屋が僅かに表を開け、少し用を済ませる。

この日は、老若男女、児童、兄弟姉妹、皆お経入りの小さな本を抱えて、朝夕2回寺院に行き、その説教を受ける。この日は、この2回の説教のある時間は、あの緊要の汽車も停止し、動かない。ただ、医者と薬局のようなものが例外である。これは、あのプロテスタント教の教えであり、英国でこの宗派が広く尊重されているのはこの通りである。これを日曜日の休息という。

英国人が子弟を教育するのに、第1にこの宗派の教えによるようだ。子弟は家でも先生の家でもこの宗教を尊重し、深く教義を信じる。日々3、4回の食事で、食卓に着き、食べようとするときに、その場の長老があああの経文を唱え、終わった後に、食事を始める。これが大体の英国人の風習である。私がしばらく住んでいたロング氏の場合も、4度の食事のたびに、1つもこの経文を欠いたことがなかった。これがプロテスタント教の決まりである。この宗派のもっとも凝り固まった者は、日本の法華や一向宗の信者よりも甚だしい。毎月4、5回の日曜日ごとに、家内一同謹慎し、飲食の類もこの日は新たに作らず、新たに煮炊きもしない。ただ、冷たい食事をし、召使達を働かさない、ただ朝夕2回寺院に詣でて、経文を読むことでその日の務めとする。大体がこの状態であるが、人により程度の差がある。とても頑固に宗派を信仰する者もいる。

私もよく考えると欧州人がその子弟を教育するのに、宗教については、この宗派による外はない。先ず、児童が6、7歳から親元を出て、小学校に入学させて、子をその教師に預け、鞭で褒めたり貶したり、その命に任せる。そして、1年の内、暑さ、寒さの時期2度の休学で2、3カ月の間親元に帰る他は、常に在校して10年の歳月を過ごす。そして、この間、天地、万物、世界の諸般の状態、理論を学び、広く色々な人と交わり、普く外国の人と接し、その知識を開き、その才能を深く磨く。邪悪なことも見分け、それに対応する。さらに、欧州諸国の学科教育は、知識や才能を磨き、見識を広げるが、忠孝や節義をあまり教えない。そこで、人の才能が伸びるに応じ、その知恵を使い、行いを顧みず、悪行や邪なことを行う輩が後を絶たないことを心配して、この宗教を行うものと考えられる。人民に良いことを勧め、悪いことを叱る基とするのは日本の仏教と同様である。しかし、欧州の学校で教えるときには、君主と臣下、父と子の節義等はとても軽んじられ、殆どないに等しい。哀れである。

墳墓

英国人の死者への葬儀は極めて簡便である。その状況を見ると大抵通常の葬送は、ただ2台の馬車で済む。前に死体を収めた車があり、後ろに葬送する主人の車が付く。そのあとに人々が続くが、これは知人友人である。欧州では、葬儀の道具に黒色を尊び、馬車、衣服、装飾など皆黒で、車を引く馬車も黒色である。日本と全く反対である³⁷。大体普通の葬儀は、馬車2両か3両である。私があるとき、一大葬列に出会った。その馬車の数、前後の行列の人数が多く、装いも美しく、旗も多く、鉦や太鼓の鳴り物もあった。ロンドンでは珍しい多人数の葬列であった。これは、軍務大臣の葬儀と聞いた。

私がある日、英国人の墓を見たが極めて簡素であった。ただ地上に、高

³⁷ 明治時代より前の日本では喪服の色は白であった。

さ3、4尺、幅1、2尺、篤さ寸ほどの石板に何か彫刻し、建てた。別に台石、花瓶、水盤等の物がない。これを寺院内の草原に数多く立てるだけである。しかし、身分の高い人の墓を見たことはまだない。日本のような年回の法事などを聞いたことがない。死後の祭祀がととても疎遠のようだ。私は以前、航海中、インド洋のシンガポール港に上陸し、馬車でその市街を動き回ったが、この市中も野外も中国人が住み、小店を開き、商売をしていた。その様子はとても汚く醜悪であった。しかし、道路や山岳の所々に墓があり、その様子を見ると、それぞれ高く土を盛り、または石を畳んで、前に石碑を建てる石面に大清皇邦云々君、云々公等と金文字や朱文字で彫刻してあった。その様子は、とても尊大で美しいものもあった。この地に住む中国人等の多くは、貧民で、家屋、衣服、体が汚い者でも先祖の死者の神霊をこのように祭っている。しかし、文明開化で世界に有名な英国人等は、先祖の死者の神霊を祭ることで、遥かに中国人に劣る。これも教育の当然の結果というべく嘆かわしい。

欧州人は、死者の凶事のあったことを知らせるのに四辺が黒縁の紙に書き、同じく黒縁の封筒に入れて送る。これが普通である。しかし、死者の親族が日本のように喪に服することがない。しかし、死者の子弟たちは、1、2年の間、その帽子の上に黒いラシャで巻き、半ば被る。この間、地方に手紙を送るときは、上の黒縁の手紙を使う。これは、服喪を憚るためであろうか？その他通常と変わったことはない。日本のように、家の中に神仏の壇もなく、死者の戒名や位牌等を祭ることもこれまでにない。

寺院の状態

前に述べた、日曜日には、朝夕2回寺院に詣で、その説教を受け、その経文を習うのが英国の風習である。私はある日、その日曜日の夜、英国人と共に、寺院に行き、その状態を見たが、その寺院の軒がとても高く、とても大きく、広い堂内に数百の座席を置き、左右に高い階楼を組み、座席を3、5人ずつ座るよう区割りし、それぞれの座席に着かせる。老若男女の区別が当然ない。その様子が日本の劇場の座席と同じである。堂内には

数多くのガス灯が付き、その明るさが昼のようだ。

そして、説教が始まろうとするときに、一連のミュージック（琴瑟の音を出す楽器である）を鳴らし、牧師始め、ここに座る皆が何かを歌い、暫く唱えるがこれがまた経文である³⁸。終わってから牧師が声高に説教するが、中々長い。その後また、鳴り物を鳴らし、歌う。このようにすることが数回で、大体3時間である。その終わった後に皆帰路に就く。しかし、この堂内が広いので入った人数は数百である。この堂内への出入口が僅かに2か所のとても小さな門戸である。そこで、衆人の出入りに雑踏、混乱するはずがそうではない。それぞれ順番に出て、道を譲り合い、先を争わず、静かに歩き、混まない。礼を厚くし、謹慎する。皆すべて、この寺院に入ってから、出るまで黙って、あえて声高に言わず、笑わず、謹慎がとても極まる。しかし、あの鳴り物で斉唱するときは、全く普通の歌唱舞踏を楽しむのと同じである。また、その次に牧師が説教するときは、頭を下げ、身を低くし、聴き入り、頭を挙げたり、上を向いたり、呟いたりする者が全くない。声を出す者もない。老若男女、児童全て頭を下げ、沈黙して、座り、同じく説教を聴く。その教えが良く届くようだ。私は、この夜、3時間堂内でその様子を観察したが、説教や経文の意味が分からなかった。ただ、上を見るとこの堂内の戸や窓を全て閉め、中に数百人座り、また、数百のガス灯を花や葉のように連ねて照らす。そこで、空気の入替えができない空気中の酸素が皆人の呼吸と燃火のために減り、堂内中に炭酸ガスを生じ、3時間の終には堂内の空気が皆炭酸と窒素ガスとなった。私はこの空気中にあり、その窒素に触れ、目が眩みそうになった。その後ようやく抜け出して、戸外に出て初めて、新鮮な空気を吸った。後で英国人に聞くと、彼らは習慣になり、そう感じない、と答えた。私は、一人で密かに笑う。私だけがその空気に慣れていないことを。彼らは、あの原理を明らかにしながら、その通りにしない。さらに、窒素、炭酸を溜めてその不純な空気の中に安住していると。

³⁸ 讚美歌のことである。

この寺院の牧師、1年に約9百ポンド（日本の約4,500両）受け取るという。1つ寺を新たに建てるとその費用が約3万ポンド（即ち、15万両）という。この寺院はかつて政府に関係しなかった。夫々市内の檀家に依存するという。私がロンドン滞在中、ある日、新聞日誌を見ると、寺院に老若男女、児童幼児が座っている最中に、近隣で急に失火との知らせを聞き、皆が争って、寺院を出ようとし、この出入り口が狭く、人数が多く、その混乱で15人が踏まれて死んだという。

市街の警官

英国の都市に警官がいる。英語でポリスマンといい、市中の警備、非常時の予備に設けた役職である。ロンドン市や周辺農村の東西南北の角どこでもこの警官を見ないところがない。辺鄙なところでも約1、2町の間にその警官の1人、2人を見ないところはない。また、ロンドンのように町中の往来が激しく、迷い易い土地では、大体1町に1、2人多いときは3、5人を見ることがある。この警官は、市中に休憩する場所がなく、いつも街角を歩き回り、努めて絶え間なく巡回する。一番の役目は、市中で、盗難、喧嘩、口論を直ちに押しさえ、市中で雑踏すればその混雑を防ぎ、町や村を往来する人に道順を教え、あるいは道を間違え、方角が分からなくなった子供や女性を見れば、その家まで送ってやり、とても丁寧で、自国民、他国民を差別しない。また昼夜、市中や村里を歩き回り、とてもその警備に努める。そして、この警官の服装、帽子等が当然、普通人と違い、腰に太い2尺ほどの警棒を帯びる。これは、町や野原での乱暴な賊徒を取り締まる道具であると見え、この警官は、市や村の監視係であり、行き帰りの人民の要である。都市や地方に不可欠の大事なものである。

銀行

英国人の家事を見るとその財産の貧富に関係なく、その家の中に全ての金銀を貯め置くのではなく、皆これを市中の両替所に預け置く習慣である。

そしてこの両替所から預かり証券³⁹を渡す。そこで、毎日自宅内にある金貨はとても僅かで、実に小遣い銭だけである。もし金銀が入用であれば、この証券に金額と声明とを記載し、両替所にもっていけば、すぐその金額を渡す。この両替所の預り金に利息として1か年に1ポンドに1シリング付ける決まりである。私は、ロンドン滞在中、毎月の収入金を受け取りに度々この両替所に行き、この状態を観察した。

また、英国に「ポスト・バンク」という（飛脚会社の両替所である）諸地方の飛脚会社の両替所がある。当然、政府が預かり、法律で全く貧民のため置かれた。この法では、例えば、先ず1か所の飛脚会社に10ポンド預けるとこの会社からその証券を渡す。これを持ち、英国中の市町村どこでも急に金銭が必要になれば、その地の飛脚会社に行き、必要な金銀を受け取る。東西南北どこの場所でも差し支えない。この預金に1か年1ポンドに6ペンス（日本の2朱）の利息の定めである。この預金が200ポンドに達すれば、それを超える金額を預け主に返す。預け金を200ポンドに限るためである。

ロンドンの市中に「バンク」銀行（両替所）というものがとても多い。しかしこれは、皆民間企業で英国政府が預かるのではない。ただ、「ポスト・バンク」だけが政府が管理するという。

ロンドンに紙幣がある。その金額が5ポンド以上7万ポンドまでという。また、スコットランドとアイルランドでは、1ポンド以上の紙幣を置くという。

相続

英国人の相続というのは、もし父が死ねば、その母と子弟等がその家の金銀家財を皆分配してそれぞれの家にもっていく。しかし、長子がその家や土地を所有するのが決まりという。私がロンドン滞在中に見聞したとこ

³⁹ 預金通帳である。

ろ、諸家庭ではこのようであった。英国の人民は、市町村で職業として商業に最も優れていることは万国に秀でるが、その国民の貧富の格差、優劣の差が異なることが避けがたいようである。ロンドンの繁栄が実に万国に抜きでる。しかし、その住民には、巨万無数の財を積み、安逸、富貴その極限にある者がいる。家屋や庭園がとても広く、家族には貧乏人との違いを知らない者がいる。また、貧困、窮迫して朝暮れの煮焚きの煙も出せない者がいる。母子が手を取り合い、家ごとに物乞いし、姉妹の少女が道路で叫び、通行人の袖の下に蹲る者がいる。実際、富家豪商が軒を並べ、貧民窮子もまた肩を並べている。

婦人

欧州人が婦人を尊重し、敬い見る習慣は、日本の習慣と全く相反する。その座席や飲食の際に、極めて多くのことで、婦女を優先して振る舞い、はなはだしい場合には、夫が妻のために奔走し、給仕するように見える。これは非常に極端な事例である。そして、英国人が妻と離婚するのは、法律上とても難しく、やむを得ない大きな理由がなければ、できない。そこで、英国政府にこの裁判所があり、人がその妻を離婚するときは、その理由、経緯、正不正の詰問を受けるため、男女ともにこの裁判所に呼び出される決まりである。私がロンドン滞在中、ある日新聞報道によれば、英国人某氏がその妻を離婚して、夫婦がこの裁判所に糾問を受けたが、その始まりは、その妻が英国王の太子と関係を持ったということで、ついにこの裁判所に英国王の太子を呼び出した。そして3人が対決して、判決されたが、その尋問が分かりやすく厳格だったという。その事情の次第は省略する。

英国の法律は、とても公明正大で、身分の高い者を除かない。その太子といっても、免除しない。法律を曲げたことがない。その尋問の仕方も普通人と異ならなかったという。近代の珍しい話ではないか。そこでこの紙端に書いた。

橋梁税

前にロンドン市中を横断する河に前後10橋あると書いた。これは皆鉄橋、石橋で1つも木板の橋がない。この橋を架ける費用に巨万莫大の財を費やした。しかし、その建造の後、橋を往来する人民や馬車からその通行税をとり、その元手を回収する。これが普通である。その通行税のやり方は、大体、一人の歩行者に半ペンス（日本の約百文）をとる。これは往復の度毎である。馬車は、1頭立ての小車に2ペンス、2頭立ての車に3、4ペンスという。馬車は往復の内1回に税を納める。私は、ロンドン滞在中、ある日、この小車に乗り、新橋を越え、この税を出したことがある。この橋の造営は、全て政府が行い、民間は関与しない。しかし、市街の道路工事、往来の不便のため新たに街路を開くようなときには、その街の家が一緒に費用の資金を募り、造る。しかし、この振動を往来する馬車に課税して、これを蓄積して、その費用を回収した後、止める。これも通常のことである。

英国の領土

英国の本国は「大ブリテン島」で、前に述べたイングランド、スコットランドとアイルランドの3島である。この3島の人口は、僅かに3,100万人である。世界中に、その植民地を置き、地球全体の表面に全て手を述べたことは万国に抜き出た。大体その植民地の島嶼の大きなものを挙げれば、欧州内では、ジブラルタル港（西国の地）、マルタ島（地中海の1孤島）、ヘリゴランド（バルティック海の1孤島）で、アジア州では、ヒンドゥスタン、セイロン、インド、シンガポール、香港であり、アフリカでは、ケイプ植民地（喜望峰）、ナタール植民地、モーリシャス、セイシェル島、セント・ヘレナ島（ナポレオン1世が配流され、死んだ島）、ギニア⁴⁰とガンビアであり、米州では、カナダ（ノヴァ・スコシア、ニュー・ブランズウィック、ニュー・ファウンド・ランド）、バーミューダ島、ジャマイカ、

⁴⁰ ギニアは、旧仏植民地であるが、植民地化は1891年である。

リュカイエ⁴¹、バルバドス、トリニティ⁴²、アンティル諸島、ユカタン⁴³、グイヤナ、マルビナス・フォークランドであり、オセアニア州では、ニュー・サウス・ウェイルズ、ヴィクトリア、タスマニア（以上豪州）、ニュージーランド（シャタム島、オークランド）、マカリー島⁴⁴である。

英国の人口は、本国と植民地を合わせ、2億人に達するという。また、大きいものだ。

私は、ロンドン見聞略誌をここで終える。

私が欧州を旅行し、初めに英国に滞在したのは僅かに4カ月間である。そして、私は当然、英語を知らない。その国にいて、様々な状態の1つも聞いたり、尋ねたり、理解することができない。また迂闊というだけだ。時々、偶々、仏語が分かる人に会い、僅かに質問し、その後自分で聞くだけだ。

その4か月間の旅行中、朝夕に耳に触れ、口で試した習慣で僅かに1、2語を覚えた。1、2の文字を読むことができるようになった。終わり頃、その言葉が微かに耳に入るのを感じた。また、おかしい。微かにその言葉が耳に停まり、また少し舌が滑らかになる気がするときは、その地に留まっても、その味わいがあるのが分かり、その地に慣れ親しむに従い、心に一つ楽しさを感じる。また、おかしいものだ。天地、万国、処が変われば、その慣習も違う。私がよく知っているものは、彼らが知らず、彼らが尊ぶものを私は軽んじる。その間の事情を知るのは、また一つの楽しみである。

明治3庚午年2月

正元 ㊦

(ロンドン見聞略誌 了)

41 不明。

42 現在のトリニダード・アンド・トバゴ。

43 メキシコの1州であり、英国植民地になったことはない。

44 不明。